

# 気と宇宙エネルギーの科学 1992年 日本教文社

松本 順 (まつもと じゅん)

東京大学経済学部卒、新聞記者。経営コンサルタントを経て、経営心理学研究所を創設。千数百社の経営者、管理職、幹部の指導に当る。才能開発研究の第一人者。

## 低次元の世界と高次元の世界

ツイてるときと、ツイでないときと、どう違うのだろうか。それは、違った次元の世界にいるので、やることがうまくいったり、うまくいかなかったりするのだと考えると納得がいく。

というのは、この世には高次元の世界と低次元の世界とがあって、高次元の世界にいるときは、やることなすことうまくいくが、低次元の世界にいるときは、なかなか思うようにいかず、苦労することになる。そして、多くの人は、低次元の世界にいることが多く、欲することが思うようにいかないのである。

低次元の世界にいると、欲することがなかなか思うようにいかないが、高次元の世界にいると欲することがうまくいくようになるのはどうしてなのか。疑問をもたれる人が多いと思うから、ここで低次元と高次元の世界について説明しておこう。

低次元の世界とは、縦・横・高さの三次元の世界と、これに時間を加えた四次元の世界とを総称したものである。

高次元の世界というと、まず五次元の世界が問題にされようが、五次元の世界はいったいどこにあるのだろうか。低次元の世界にさらに一次元を加えるとすると、いったい何を加えたらいいのか。

この次元の問題については、人によっていろいろの考え方があるが、私は五次元目に「心」を加えるという考え方をしている。これは一見突飛な考え方のように見えるが、そうではない。

といいうのは、今までの科学の考え方では、心というものが科学にとり入れられておらず、物質だけが科学の対象になっているからである。なぜ、心をとり入れてないかというと、心を科学にとり入れると客觀性が保てなくなるからである。

科学というものは“いつ、誰が、どこでやっても同じ結果”にならないと、これを法則として認めないと建て前をとっている。

ところが、心を科学にとり入れると、信念の強い人がやると望ましい結果が出るが、信念の弱い人がやると、まるで結果が違ってしまう、というように、信念の強弱いかんによって違った結果が生ずる。これでは科学の純粹性が保てなくなる。だから、科学には心というものをとり入れるわけにはいかなかったのである。

だが、科学に心をとり入れなかったことによって、現実にはたいへんまずい結果が生ずることになってしまった。というのは、科学だけでは、現実に起こっている出来事(現象)を正しく説明することができなくなってしまったからである。

## 科学では説明のつかない超能力

世の中には、科学では説明のつかない奇蹟的なことがたくさん起こっている。超能力現象といわれるものがそれである。スプーン曲げとか、テレパシー、透視、念動、予知、物品引き寄せ、テレポーテーションなどいろいろなことが起こる。

精神世界が開けてくるといわれる“アクエリアスの時代”は21世紀から始まるといわれているが、不思議な現象はますます頻発する傾向にある。それでもおおむね年輩者の中には、今までの科学偏重の教育の影響が強いので、こういうことを信じようとしない人が多いが、若い人たちや子供たちは、新しい時代の精神を生きていて、抵抗なくこういう現象を受け入れる人が増えている。

こういう時代の趨勢に対して、今までの科学では收拾がつかない状態になりつつある。こういう状況に対応するためには、今までの低次元の科学に対し、心を入れた高(五)次元の科学(これがニューサイエンスということになるが)を設けることがどうしても必要になってくる。そうすることによって、今まで説明のつかなかった超常現象を理解する道が開けてくると思われる。

## 科学に心をとり入れる——高次元世界に物質は存在しない

五次元目に心を加えると、今までとどう変わるのだろうか。もちろん、低次元の世界でも、人間は心をもって生活していた。だが、科学の世界では、心の存在は全く認められなかった。信念の強い人が、信念の力によってスプーンを曲げて見せても、そんなことは科学的にはありえないと一笑に付されるだけだった。

ところが、五(高)次元の世界で、心が科学の対象と考えられるようになると、なぜ、心の働きによってスプーンが曲がるのか、信念とは何か、信念はなぜ物体に対して影響力をもつのか、ということが真剣に考えられるようになる。

こうして、心の物体に対する影響力、ひいては、心自体の科学的解説が試みられるようになる。

今まで、心を科学的に解説することはほとんど行なわれなかつたが、五次元とは“心の世界”であるとなると、物質(物体)の世界である三次元、あるいは四次元の世界とはまるっきり違う世界であるということが分かつてくる。

低次元の世界では確固とした物体というものがあり、物体があれば、一つの物体と他の物体との間に空間が生ずることになる。また一つの物体から他の物体に行くには時間がかかるから、時間も生じてくる。この空間、時間は誰にとっても同じ大きさ、長さをもっている。だから客観性がある。客観的時空の世界が低次元の世界の特徴である。

これに対して高次元の心の世界では、物質は存在しない。心というものは、まことに波のように把みどころのないものであり、空の世界であるといえよう。だから、物体は何も存在しないが、心は存在する。

どのコンプレックスの影響を受けているのか

コンプレックスというものは、その人個人のコンプレックスだけにとどまらず、家族的コンプレックス、地方的コンプレックス、国家的コンプレックス、人類的コンプレックス、宇宙的コンプレックス(宇宙に関する今までのいろいろの先入観——UFO、宇宙人、チャネリング等)というように、いろいろのコンプレックスがあり、しかも、これらのコンプレックスは、微妙な影響を与えるものであることから、自分は今、どのようなコンプレックスに影響されているか、と冷静に考え、これらのコンプレックスのうち、どれに一番強く影響されているかをよく検討してみることが必要なのである。

どのコンプレックスが、現在、自分に悪い影響を与えていているかを知るには、まず、そのときの自分の「気分」に注意することが大切である。

### [ 気分メーター ]

10 思いのまま (思うことがどんどんうまくいく)					
9 得意 (ツイてくる)					
8 信念 (信念化してくる)					
7 確信 (確信がもてるようになる)					
6 勇気 (失敗、危険を恐れなくなる)					
5 強気 (積極的、挑戦的になる)					
4 高揚 (気分が高揚してくる)					
3 元気 (バイタリティが沸いてくる)					
2 冷静 (気分が落ち着いている)					
1 安定 (気分が動搖していない)					
0					
-1 動揺 (気分が落ち着かない)					
-2 不安 (なんとなく不安だ)					
-3 不愉快 (心や体の調子がよくない)					
-4 憂うつ (気が滅入ってしようがない)					
-5 弱気 (気が弱く、消極的である)					
-6 くよくよ (つまらないことにくよくよする)					
-7 いらいら (気分がいらいらしてしようがない)					
-8 おそれ (恐怖心が強くなる)					
-9 絶望 (自暴自棄になる)					
-10 死にたい (死んでしまいたくなる)					

そこで自分の気分を調べるために便利な「気分メーター」の活用をお奨めする。

この気分メーターは、まん中がゼロで、そこから上へ上がるにつれて気分がよくなっていく状態を示しており、ゼロから下は次第に気分が悪くなっていく状態を示している。

そこで、自分の気分の状態を調べようとするには、自分の今の気分が、この表のどの部分に該当するかをチェックしてみる。

たとえば、朝、起きたときの気分がなんとなく落ちつかないとか、不安だという場合には、マイナス1の「動揺」、マイナス2の「不安」をチェックする。

あるいは、なんとなく体の調子がよくない、弱気になっているときは、マイナス3の「不愉快」、マイナス5の「弱気」をチェックする。

こうして自分の現在の気分を、気分メーターでチェックしてみるとことによって、自分のもやもやした気分がはっきりしてくる。

## 気分の悪さの原因を突きとめろ

そこで、次に考えねばならないのは、気分が悪いのはいったい何が原因だろうか、ということである。

このように考えて、その原因を突きとめようと行動を開始するとき、気分の悪さの背後には、必ずなんらかのネガティブ・コンプレックスが存在していることが分かってくるのである。

たとえば、私の場合、朝、目が覚めたとき、頭がすっきりせず、どうも不愉快なときは、たいてい睡眠不足のための疲れが、頭や体に残っているのが原因である。

「昨晩は午前2時頃まで仕事をしたのに、今朝はいつもより早く目が覚めてしまった」とか、あるいは「寝るのは12時頃だったけど、昼にやっていた仕事の興奮で、寝てからも頭がカッカして、明け方近くまで目がさえていた」のが原因だと分かってくる。

これで私の個人的コンプレックスの原因が一応はっきりした。睡眠不足が原因で、体や頭の不調を来たし、気分を悪くしているということになる。だが、ここで満足していれば、本当のコンプレックスの解明にならない。

そこで次に考えねばならないのは、睡眠不足になると、なぜ頭や体の調子が悪くなるかということである。この問題にぶつかったとき、日本人的コンプレックスや人類的コンプレックス、あるいは医学的、生理的コンプレックスがその背後にあって、影響していることが分かる。

たとえば、日本人的コンプレックスとしては、最低でも6時間ぐらい眠らないと体に悪い、できれば7、8時間眠るのが理想だ、というのがある。この日本人的コンプレックスが生ずるようになったのは、その背景に「睡眠は6、7時間とることが必要」という世界人類的コンプレックス、あるいは医学的・生理的コンプレックスが影響していると考えられる。

## 突然病気になるのはどのコンプレックスのせい?

このように、①個人的コンプレックス、②家族的コンプレックス、③国家的コンプレックス、④人類的コンプレックスという4つのコンプレックスが、あるときは複雑に重なり合って、わたしたちの気分に大きな影響を与えていることが解ってきた。

この4つの中でも、個人的コンプレックスが強く影響している場合は、自分がこれまでに体験したことが原因であるから、わりと自覚しやすい。ところが、家族的、国家的、人類的コンプレックスが原因の場合は、自分が思ったことも体験したこともないのに、ある日突然、病気になったり、不幸に襲われたりするから、いったい、なぜこんなことになったのか、という原因がなかなか判らないので、ひどくショックを受けることがある。

たとえば、先にあげた40肩、50肩コンプレックスというのがそうだ。ある日突然理由もなしに肩が痛くなつて動かせなくなるのだから、びっくりする。もっとも、この場合は、年輩の経験者が周囲にいれば、「それは40肩だよ」と教えてくれるから、安心できるわけだが。

## 偶然はない

フランスのすぐれた生物科学者であるピエール・ルコント・デュ・ヌイ博士は次のように語っている。

「物理上のいろいろな法則はすべて、物質を構成する無数の分子の偶然な運動によりできあがっている。だから、物質界はすべて分子の偶然な運動によって法則が成り立ち、偶然が法則を決めるといえる(偶然の法則)

ところが、この偶然の法則によっては、生命の誕生は説明できない」

というのは、生体に不可欠な蛋白質のような分子が、偶然によってできあがるなどということは、稀有のこととて、たとえこの稀有のことが、2、3回続いて起こり、2つか3つの蛋白質の分子ができあがったとしても、生物ができあがるには、何億もの分子が組成されることから、こういうことが起こるのは、偶然だけでは不可能だと考える方が自然だ。

デュ・ヌイ博士は、生命の元になる蛋白質のような分子が、偶然の法則だけでできあがることが不可能なことを、次のような例をあげて分かりやすく説いている。簡単に要約させていただく。

一千の白い粒子と一千の黒い粒子とを、直径がこれらの粒子よりほんのわずか大きいガラス管に入れて、一列に並ぶようにする。そして、白い粒子は管の上部、黒い粒子は管の下部にあるとする。

この管の下方の端は閉じているが、上の端は中空の広いガラス管に通じている。管をさかさにすると、中の粒子はその球の中に落ち、振れば混合する。今度はその管をまたひっくり返すと、粒子は次々に管の中に落ちて並ぶが、もう元のように白と黒とが別々に二手に別れて並んだりしない。むしろ、管全体が灰色に見えるように、白黒が混じり合ってしまって、最初のように白黒が色分けされて並ぶ確率は稀有となる。

その確率は分数で表すと1万分の489ということになる。これは、とうてい起こり得ないような確率ということになる。ところが、生命体の蛋白質分子が偶然によってつくられる確率は、これよりももっと低いという。

## 生命は偶然の法則によらない

生命体の元になる蛋白質分子が、偶然によってつくられる確率がきわめて低いのは次のことからも明らかである。

蛋白質分子ができるためには、少なくとも、炭素、水素、窒素、酸素などの4種類の原子が結びつかねばならない。各原子の必要構成原子数を2,000、各原子の原子量を10とすると、4種で80,000からの原子を組み合せねばならず、これらの原子の組み合せは、規則正しく行わねばならず、けっしてでたらめの結合は許されない。

そうすると、80,000からの原子が、まったく偶然な運動で規則正しく結びつく確率となると、今あげた白黒の粒子の配列よりも、さらに比較にならないほど小さいものになる。

しかし、いかに小さな確率であっても、絶対に起こらないことはありえないから、この稀有の組み合せが2回か3回続けて起こって、あとは全然起こらないということもあります。しかし、こうして2つか3つの蛋白質分子ができあがっても、生命は問題にさえならない。

デュ・ヌイ博士の見解によれば、要するに生命体というものは、偶然の法則によっては生まれることができない、ということになるのだ。にもかかわらず、地球上に生命体が繁殖し、その1番すぐれた種が、人間として繁栄を保っているのは、生命体は偶然の法則によらず、ある特別の力が働いてできあがったものだ、と考えざるをえないことになる。

### 現代科学では解らない生命の神祕

こうしてデュ・ヌイ博士は、生命の発展ないし進化に関するあらゆる現象を、科学的に説明することはまったく不可能であり、現代科学の基礎をくつがえすことなくしては、その現象は説明できない、という結論に達している。

要するに、現代の人間の科学的知識によっては、生命の起源どころか、生命をつくるのに必要な蛋白質の発生を解明することさえ不可能なことになる。こういうわけだから、科学の全能を盲目的に信じるというのではいけないことになるのだ。

科学的(合理的)思考は、わたしたちが宇宙の現象を理解するための有力な方法の1つではあっても、これが全能ではなく、これ以外の方法(非合理的方法による宇宙の直観的理解の方法)があることを忘れてはいけない、とデュ・ヌイは警告している。

デュ・ヌイは、人間の進化もまた、偶然の法則では説明できないといっている。というのは、人間の先祖である小さな生物が進化して、精巧な頭脳をそなえた人間になるまでの30億年間の変化は、やはり偶然では説明できず、「反偶然」(宇宙意識)の力が連続的に働いた、と考えざるをえないからである、と説明している。

### 宇宙意識は反偶然の力

人間の進化のあとを振り返ってみると、それは環境からしだいに自由になっていく過程であることがわかる。精巧な頭脳をそなえた人間が発生するに及んで、いっそう環境からの自由が促進され、ついに環境を支配するまでに至っている。

このように、人間の進化は、科学的法則がよって立つ「偶然の法則」によっているのではなく、それとは別の「反偶然」(宇宙意識)の力によって導かれており、進化するにつれて、次第に自由を獲得していることがわかる。

ということは、人間の生命(意識)の中には、本来、科学的法則に支配されない“宇宙意識”があり、この宇宙意識が、人間の進化の演出をしてきたことによって今日のすばらしい可能性に満ちた人間が創り上げられたのであって、もし、偶然の法則だけによって進化が行われてきたとすれば、とうてい今日のようなすばらしい人間が実現しなかったと考えられるのである。

やはり、人間の意識の根底には、“宇宙意識”があり、いろいろの場合に人間の進化

を助けてきた、ということは紛れもない事実である。だから、わたしたちがこの事実に気づき、わたしたちの意識によって、宇宙意識を日常うまく働かせることができれば、わたしたちは宇宙意識にとってかわって自分の才能を開発し、肉体や運命を意識の思うままに動かすことができるるのである。

### 心の中の「巨人」

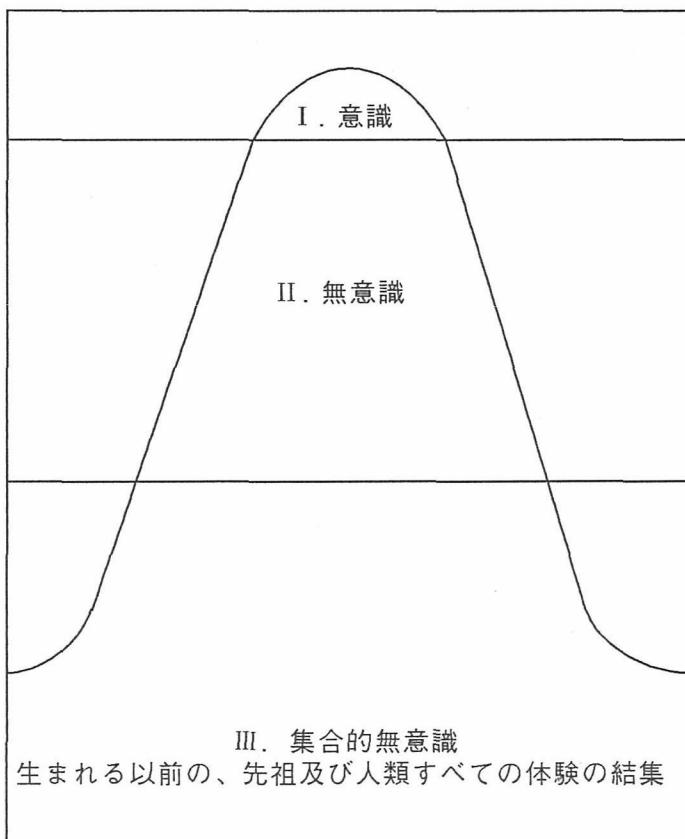
ユングは、人間の心の中には「巨人」がいるといっている。ユングの理論によると人間の心の中には、その人が生れてから今までの記憶(無意識の中にある)だけではなく、その人が生まれる以前の先祖の経験が結集されたもの(ある種族の経験の結集されたもので、集合的無意識の中にある)があるという。

このことは夢を見るとわかる。夢の中には、その人が経験したこと以外の、ある民族の共通した象徴などがよく現れる。たとえば、夢の中に現れる槍は男性の性器を現わし、泉は女性の性器を現わすなど、いろいろの共通の象徴が現れることから、集合的無意識にあるものは夢の中に現われると考えられている。

過去の幾世代もの先祖の体験の結集したものが心の中にあるとすれば、わたしたちの心の中にはすばらしい英知にあふれた「巨人」が住んでいる、ということになる。

こうした人間の心を図で示すと、図のようになる。

[ 意識の3構造 ]



IIIの「集合的無意識」の英知が意識の方にのぼっていくことができれば、人間はすばらしい能力を發揮することができるが、そうすると、IIの「無意識」やIの「意

識」が途中で邪魔することが多い。だから普通は意識にまでのぼることができない。

しかし、ごく幼い頃はIIの無意識が少なく(たいした経験をしていないので)、Iの意識もあまりはっきりしているとはいえない。だからIIIの集合的無意識にある英知が表面にのぼりやすくなる。小さい子供がすばらしい絵をかいたり、才能を発揮したりするのはこういう理由による。だが成長するにつれてIやIIの抵抗が大きくなるので、集合的無意識の英知は、だんだん意識にのぼりにくくなる。にもかかわらず、英知を意識にのぼらせようとするには、次の3つが必要となる。

- ① 無我夢中(徹底して集中する)になることによって、意識を忘れてしまうこと
- ② 徹底的に訓練することによって、意識の抵抗をなくすこと
- ③ 英知の存在を信じ、これを利用すること